

## マラウイ国における農業水利施設とその利用について（その2）

22年1次隊 菅野 将央

### 1. はじめに

マラウイ国における小規模かんがいの状況及び効果の一部については「マラウイ国における農業水利施設とその利用について（その1）」で述べた。整備後の各施設は効果を十分に発揮し、乾期作を可能にしている。（写真1，2）

本稿では、施設整備後の農村の変化と課題，施設管理状況について整理したい。



写真1



写真2

### 2. かんがい施設整備後の農村の変化と課題

#### （1）農村の変化

乾期においても主食となるヨーロッパンポテトやメイズが生産可能になり，自家消費用の生産はより安定的になったといえる。また，近隣マーケット（市場）への出店，リロングウェ等都市圏からの買い付けなど，現金収入を得る機会が増えたことが大きく変わった点であると思われる。マーケットは，地域により異なるが，週に一度から月に数回の間隔で各村落地域の中心部で開かれる。さらに，かんがい整備事業に連動して小売り施設を建設する取り組みも一部行われている。



写真3：デッサタウン内のマーケット（参考）



写真4：建設中の小売り施設

かんがい整備区域内は，組織化された生産組合はなく，いくつかの生産者グループを作りマーケット等で農作物を販売している。道路状況が劣悪なため，輸送のほとんどは人の手によるもので，大量輸送はできない。

## (2) 課題

前項で述べたように、整備前後では農村部の営農スタイルは大きく変わった。一期作から二期作を可能にしたことが、かんがい整備による大きな効果といえる。しかし、かんがい施設が問題なく機能しているにもかかわらず、休耕してしまう事例が発生している。ある事例では、整備後2年目にして休耕している区域が発生し、かんがい区域の5分の1程度が休耕地となっている(写真5)。その原因の聞き取りを行ったところ、理由の多くは以下の2つに大別される。

乾期作のための種子および化学肥料が購入できない

十分な備蓄があるため、より小面積の生産で問題ない

については、かんがい地区を対象に作付けに必要な種子の一部を無償で配布している。については各村を訪問し、営農状況の確認と休耕がある場合は、聞き取り及び啓発・指導を行っている。



写真5：種子の配布



写真6：写真手前が休耕地

## 3. まとめ

必要な区域に必要な通水を行い、二期作を可能にするというかんがい整備本来の目的は一定の成果が得られていると考える。しかし、農家の資本の不足や流通の不備など、その他の要因により、充分にかんがいの効果が発揮できない状況がある。

マラウイにおける従来の営農サイクルは、土地を休ませながら営農する地力に依存した形態であった。人口増加等による需要増加により土地を休ませることができず、連作により安定した収量が得られないという問題も生じており、化学肥料にある程度頼らざるをえない。雨期前には農家に対し、種子及び肥料が格安で購入できるクーポン配布があるが、乾期作は対象にならず、乾期作においては農家の支出が発生する。また、前項で都市圏からの買い付け等もあると述べたが、農産物の集積・流通が未発達なため、食料保障の視点からみると十分な対策はなされていない。このような農家の経済状況や社会資本の未整備により、営農サイクルがかんがい整備以前に戻りつつある地域がごく一部ではあるが発生している。この点が大きな課題である。持続的な営農が不可能になれば、かんがい施設の維持管理の面で不具合が生じてくるであろう。

かんがい施設を十分に活用できない要因は、未だ聞き取り調査等の標本数が少ないため断定はできない。そのため、さらに時間をかけて農村の動向を観察していく必要があると思われる。